最後の暗殺者（下）

The Bourne Ultimatum

ロバート・ラドラム

篠原 慎 訳

角川文

Robert Ludlum

最後の暗殺者（下）

篠原 慎＝訳

角川文庫 8123

平成三年一月十日　初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集部（〇三）三八一七—八四五一

営業部（〇三）三八一七—八五二一

〒一〇二　振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷　製本所——千曲堂

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ラ 1-19

ISBN4-04-254919-5　C0197

江苏工业学院图书馆
藏书章

最後の暗殺者

ロバート・ブラム
篠原慎一訳

角川文庫 8123

THE BOURNE ULTIMATUM

by

Robert Ludlum

Copyright © 1990 by Robert Ludlum
Japanese translation rights arranged with
Henry Morrison Inc.,
through Japan UNI Agency Inc.

日本語版翻訳権独占
角川書店

最後の暗殺者 (下)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

主な登場人物

デイビッド・ウェブ……東洋学者（ジェイスン・ボーン）
ジェイスン・ボーン……暗殺者
カルロス……別名ジャッカル、究極のテロリスト
マリー・サンジャック・ウェブ……デイビッドの妻
アレグザンダー・コンクリン……元ＣＩＡ秘密工作員
モリス・パノフ……精神科医
ピーター・ホーランド……ＣＩＡ長官
ジョニー・サンジャック……デイビッドの義弟
バッキンガム・プリチャード……「静か荘」の副支配人
ディミートリ・クルプキン……パリ駐在のＫＧＢ将校
ルイス・デファジオ……マフィアのボス
ランドルフ・ゲイツ……法律学者
ブレンダン・プレフォンテーン……元連邦判事
ドミニク・ラビエ……ジャッカルの手先
グリゴリー・ロドチェンコ将軍……ソビエト陸軍将校
ブライス・オーグルビー……弁護士
ベンジャミン……ＫＧＢ訓練担当官

29

マリーは夫が部屋の中で往ったり来たりする姿をながめていた。その歩き方は慎重で、力強かった。彼は書物机と二連窓の陽光に明るいカーテンとの間を、怒ったような足取りでずんずん往復している。窓からはここバルビゾンにあるオーベルジュ・デザルティストの狭い芝生の庭が見えた。マリーはこの田舎宿を憶えていたが、デイビッド・ウェブの記憶にはなかった。彼がそのことに言及すると、妻は瞬時、目を閉じて、何年も前に聞いた別の声を胸中に甦らせた。

「何よりも重要なのは、極端なストレスを避けることだ。たとえば、生命をおびやかすような状況下で生き延びようとするときの緊張感の類だ。彼がそういう精神状態に逆戻りしそうなときは――見ればすぐわかるから――それを阻止しなくちゃいけない。媚態を示して誘ったり、平手打ちをくらわしたり、泣き叫んだり、怒ってみせたり……とにかく、思いつくかぎりのことをして、鬱への進行を阻止するんだ」

モリス・パノフは貴重な友人であり、医者であり、夫の治療を援ける誘導力でもあった。マリーは部屋に入って二人きりになったあと、すぐに、夫を誘惑しようと試みたが、失敗に終わった。ふざけたふりをしてちょっと触れるだけでも、二人にはどうもぎごちない感じで、欲望を刺激されるどころではなかった。それでもべつに気まずさはなかった。ベッドで抱き合った二人には心の交流があった。

「あたしたちはほんとにセックス好きの夫婦じゃない？」

「以前はほんとにそうだったね」

と、デイビッド・ウェブはやさしくいった。

「今にまたきっとああなるさ」

ここでまたジェイスン・ボーンに変わった彼はごろりと半回転してベッドから降り立った。

「リストを作らなきゃいけないんだ」

彼は切迫した表情でそういうと、壁際にあるデスク兼電話台として使っている田舎ふうで古風な趣のあるテーブルに歩み寄った。

「まずわれわれが今どこにいて、どこへいこうとしているか、それから確認しておかないとね」

「あたしも島にいるジョニーに電話しなくちゃ」

と、いって、マリーもベッドから降りて、スカートのしわを伸ばした。

「ついでにジェイミーも呼んでもらって、パパとママはすぐ帰るからって元気づけてやるわ」
マリーもテーブルに近寄ったが夫――今の彼は夫であって夫でなかった――に阻まれて立ち止まった。
「それはいかん」
ボーンはかぶりを振りながら、静かにいった。
「そんな言い方ってないでしょ」
母親は目を怒りに光らせながら、抗議した。
「三時間前、リボリですべてが変わったんだ。今は何もかも以前とは違う。それくらいのことがわからないのか？」
「わかってるわよ。子供たちとは数千マイルも離れたところにいて、電話で話をしたいと思っているということはね。それくらいのことがわからないの？」
「むろん、わかっちゃいるが、それは許せない」
「ひどい人ね、あなたは、ボーンさん」
「そういわずに聞いてくれ……ジョニーやジェイミーに電話をかけるのはかまわないが――そのときはわたしも出るよ――ここからじゃまずいし、彼らがあの島にいる間は駄目だといってるんだ」
「なんですって……？」

「これからアレックスに連絡して、彼らを島から連れ出してくれと頼むつもりだ。もちろん、ミセス・クーパーもいっしょにね」

マリーは急に夫の思惑を看取して、じっと彼の顔をみつめた。

「そうね、カルロスがいるものね！」

「そう。きょう正午に起きたあの事件で、やつが狙いをしぼる所は一つしかなくなった……あのトランクイリティ島だ。ジェイミーとアリスンがジョニーのところにいるってことを、今は知らなくても、じきに嗅ぎつけるだろう。きみの弟のあの豪胆さは信頼できるけれど、やはり心配でね、島が夜になるまでにみんなをあそこから遠ざけたいんだ。カルロスのことだから、島に通じてる電話回線に情報源を持っていて、ここから電話をかけると探知される恐れがある。でも、アレックスの電話は消毒してあるから、その点、安心できるんだ。今、ここから電話しちゃいけないというのはそういう理由があるからだ。ここから島へはぜったい駄目だ」

「じゃ、お願いだから早くアレックスに連絡してちょうだい。何をぐずぐずしてるのよ」

「考え中なんだ」

ほんの一瞬、夫の虚ろな表情に、恐怖の翳が浮かんだ……それはジェイスン・ボーンの目ではなく、デイビッド・ウェブのそれだった。

「決めかねてるんだよ……子供たちをどこへ移すか」

「アレックスにまかせればいいじゃない、ジェイスン」

マリーは彼の目をじっと見すえた。
「早く電話を」
「そうか……彼にまかせばいいんだよね。じゃさっそく連絡しよう」
ベールのかかったような虚ろな表情が消え失せた。ボーンは電話に手を伸ばした。
アレグザンダー・コンクリンはバージニアのビエナにいなかった。応えたのは録音された交換手の抑揚のない無表情の声で、落雷のような衝撃をあたえた。
「おかけになった電話はただ今、使われておりません」
彼は、フランスの電話サービスが何か間違いをやらかしたのだという希望的観測にすがりついて、さらに二回、通話を試みた。それは稲妻のごとき衝撃を追加しただけだった。
「おかけになった電話はただ今、使われておりません」
三度とも同じ声が同じ応答をくりかえした。
また彼の往ったり来たりがはじまった。テーブルから窓へ、窓からテーブルへ。そのたびにカーテンを開いて不安な眼差で外をのぞき、数秒後には、しだいにふえていく名前や場所のリストに熱心に見入った。マリーがランチはいかがとそれとなく勧めたが、彼は聞いてなかった。仕方なく彼女は部屋の隅から黙然として彼を見守った。
夫のすばやい慌ただしい動きは、平静さを失なった大きなネコのそれに似て、流れるように淀(よど)みなく、不意の出来事にそなえて隙(すき)を見せなかった。それはまさにジェイスン・ボーンの、メドゥーサ時代のデルタの動きであり、デイビッド・ウェブのものではなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マリーは、デイビッドの治療が始まって間もないころ、モー・パノフが蓄積した医療記録のことを思い出した。その多くは、カメレオンという綽名で知られる人物を見たことがあると主張する人々の証言で満たされていたが、それらの証言はカメレオンの人相特徴に関して互いに大きく食い違っていた。ただし、多少なりと信頼のおける証言はみな一様に、〝暗殺者〟のネコに似た動きを指摘していた。パノフは、当時、ジェイスン・ボーンの身許を探る手懸りを求めて腐心していたのだが、証人たちから得た情報は彼のファーストネームとカンボジアのジャングルで死亡したときに心に焼きついた断片的な映像だけだった。モーは、この患者の肉体的な動きの特徴には単なる運動神経のよさ以外に何か特別の要因があるのではないかと思ってしばしば思案したものだが、奇怪なことに、そのようなものは何ひとつ発見できなかった。

マリーは自分の夫に内在する二人の人間にそなわっている肉体的特徴の微妙な差異について振り返ってみたが、魅力と嫌悪感という両極端の結果しか得られなかった。両者とも筋肉質の優美な身体で、各部分の共同作用を必要とする難かしい動きを巧みに演じることができる。ところが、デイビッドの力と動きには、気楽な達成感がともなっているのだが、ジェイスンの場合には内なる敵意が横溢していて達成感も歓びを欠いている。あるのは禍しい敵意だけである。いつかマリーがこのことをパノフに語ったところ、彼がよこした応えは簡単そのものだった――「デイビッドには人を殺せないが、ボーンにはそれができる。そのように訓練されているんだ」

それでもモーは、彼女が両者の異なる〝身体的発現〟――彼はマリーの観察を専門語でそう称した――に気づいたことを喜んでくれた。

「きみにとって標識が一つふえたようなものだ。ボーンを見たら、出来るだけ速くデイビッドを呼び戻すんだ。それが出来ないときは、わたしを呼んでくれ」

今はデイビッド・ウェブを呼び戻せないと、彼女は思った。子供たちのため、自分のため、そしてデイビッド自身のためにも、今はあえてそうする勇気がなかった。

「ちょっと外出してくるから」

ジェイスンが窓際から宣言するようにいった。

「とんでもない！　お願いだから、あたしを一人にしないで」

ボーンは、心の中で一種名状しがたい葛藤をおぼえて眉をくもらせ、声を低めて、いった。

「ちょっとハイウェイを走って電話を捜すだけだよ」

「じゃあたしも連れていって。お願い。一人でここにいるなんてイヤ」

「わかった……じつをいうと幾つか買いたいものもあるんだ。商店街を見つけて、衣類や……歯ブラシ、カミソリ……そのほか思いついたものがあれば買おうと思ってね」

「じゃもうパリへ戻れないってことね」

「いや、パリへは戻れるし、戻るつもりだけど、ホテルには泊らない。きみ、パスポートは持ってるね？」

「パスポート、現金、クレジットカード、何でもございよ。ぜんぶハンドバッグに入れてあるわ。そうそう、あのハンドバッグ、車に乗ってあなたから渡されるまで、まるっきり忘れてたの」

「ムーリスに残してきちゃまずいと思ったもんでね。さあ、いこう。まず電話だ」

「だれにかけるの？」

「アレックス」

「いなかったんでしょう」

「こんどはアパートのほうへかけてみるよ。どうもバージニアにある局の安全テントから放り出されたらしい。アレックスと連絡がついたら、次はモー・パノフだ。そら、早くいこう」

二人はハイウェイを南下して、コルベイレッソンヌという小さな町までいった。ハイウェイから数マイル西へ入ったところに比較的新しいショッピング・センターがあった。その混雑した複合店舗街はフランスの田舎に似つかわしくないできものみたいな存在であるが、逃亡者にとっては歓迎すべき場所だった。ジェイスンは車を駐車場に入れ、二人は、午後遅く買い物に来た夫婦よろしく、中央の通路をのんびりと歩きながら、必死になって公衆電話を捜した。

「ハイウェイぞいに電話が一つもないなんてけしからんよ」

と、ボーンは歯ぎしりしながら、いった。
「事故にあったりタイヤがパンクしたら、どうしたらいいんだ？」
「警察がやってくるのを待つしかないわね」
と、マリーはいった。
「さっき電話はあったけど壊されてたわ。だからわざと置いてないのよ……あそこにあるわ！」
またもやボーンは地元の電話局の交換手を相手に国際電話をかけるために必要な手順を苛々しながら進め、交換手のほうも国際電話回線への割り込みに苦労して苛立ちをつのらせた。やがてようやくつながるにはつながったが、そこでふたたび彼は落雷のショックにみまわれた。遠雷ではあったが、なんとも無情だった。
「こちらアレックスです」
と、録音された声がいった。
「しばらく外出して、重大な過失が生じたところへいってきます。五、六時間後にかけなおしてください。こちらは今、東部標準時間の午前九時半。以上、ジュノー」
ボーンは呆然となった。そして慌ただしく考えをめぐらしながら電話を切って、じっとマリーをみつめた。
「何かあったんだ。意味を探り出さなくちゃいかん。アレックスが最後にいった言葉なんだけどね――『以上、ジュノー』だ」

「ジュノー？」
マリーは目を細くつむって光を防ぎ、やがてそれを開いて夫を見やった。
「アルファ、ブラボー、チャーリー」
と、彼女は独りごつようにいってから、つけくわえて訊いた。
「軍隊でアルファベットのかわりに使う言葉でしょ？」
それから彼女は早口につづけた。
「フォックストロット、ゴールド……インディア、ジュノー！　ジュノーは〝J〟で、〝J〟は〝ジェイスン〟の〝J〟じゃない。彼、そのほかに、何といったの？」
「どこかへいくって――」
「歩きながら考えましょう」
と、マリーは夫の言葉をさえぎっていった。電話を使おうと待っている男性二人の、好奇心もあらわな視線に気づいたからだ。彼女は夫の腕をつかんで、ボックスから引き離した。
「もっとはっきりいえなかったのかしら？」
人の流れに割り込みながら、彼女は訊いた。
「録音だったからね……『――重大な過失が生じたところ』云々といってたよ」
「なんですって？」
「だから五、六時間後にかけなおしてくれって……重大な過失が生じたところへいく……

グレーブには墓地という意味もある……そうか、ランブイユだ！」
「墓地……？」
「十三年前に彼がわたしを殺そうとしたところだよ。間違いない！　ランブイユだ！」
「でも、五、六時間後というのはおかしいわ」
と、マリーは疑問を呈した。
「そのメッセージを録音したのがいつか知らないけど、五時間そこそこでパリまで飛行機で飛んできて、車でランブイユへ着くなんて、とうてい不可能よ。だって、アレックスはワシントンにいたのよ」
「それが可能なんだ。以前、二人でやったことがあるんだ。外交官の資格でアンドルーズ空軍基地から軍のジェット機でパリまで飛ぶんだ。ホーランド長官はアレックスを局の活動から閉め出すかわりに、餞別がわりに便宜をはかってくれたんだろう。そっけない扱いだが、メドゥーサの件をCIAにもたらした功績に対するボーナスだよ」
ボーンは急に手首を上げて、時計をのぞいた。
「島じゃまだ正午だ。べつの電話を捜そう」
「ジョニーのところへ……？　トランクイリティ島へかけるの？　あなた本気で考えてるの――」
「いつだって考えてるよ、わたしは」
ジェイスンはマリーの手をつかんで遮二無二、歩調を速め、彼女はよろめきながらつい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com